

か、等々の點について考えてみるつもりである。
 こうした吳・南唐政權による地域支配の分析を通して吳・南唐國家の性格の一端に迫りたいと考えている。

元朝屯田考

大島 立子

モンゴル軍は、華北を侵略した當初より、屯田を設營しはじめ、元朝では金朝と同様に邊境のみならず、ほぼ全領域に屯田を設置した。それを管轄する機關も、軍政をつかさどる樞密院だけではなく、大農司、中書省、行中書省など多くあった。その設置目的は、直接的には、(1)邊境防衛、(2)軍餉確保、(3)荒地開發が挙げられ、間接的には貧民の救済、不穩分子の監察の役を果していた。

(1)・(2)のような純粹に軍事的な目的をもって設置されたものは多い。金朝、南宋朝攻略中に随時置かれたもの、あるいは北邊、西邊、南方の邊境の地にあったものが、それである。

本來的には屯田設置は、軍事的要素の強いもののはずであるが、元朝にあつては、第三の荒地開發を目的としたものも無視できない。その多くは、金末の動亂期に荒廢した農地の再開發を理由に設置され、従つて、多くは河南行省にあつた。ほかに腹裏には、モンゴル軍隊に付與された屯田があつた。

本報告では、以上のような各種の要素を持つ元朝の屯田を検討し、それが元朝の漢人統治においていかなる機能を持っていたかを

考察したい。

『耕織圖』の流傳とその影響について

渡部 武

中國では古來爲政者は農本主義の立場をとり、その思想を體現するため好んで農桑をテーマとした繪畫が描かれてきた。ことに宋代においては杜詹の『農器圖』、曾之謹の『農器譜』、樓璘の『耕織圖』など、農業技術史上重要な圖録が描かれたが、残念なことにならずれも亡佚して傳わらない。しかし、それらは後世の農書に大きく影響を與えており、王禎の『農書』や徐光啓の『農政全書』の挿繪中に繼承されている。また『耕織圖』については、その後多くの摹本や版本がこしらえられ、朝鮮および日本にも傳わり、それぞれの國の畫壇や農學に深く影響を及ぼしている。わが國においては室町末期に宋畫系の『耕織圖』が傳わり、狩野派の畫家によつて一派の粉本の一つにされ、寺院や豪農の家の襖や屏風に實に多くの『耕織圖』(とくに耕圖)が描かれていく。織圖も養蠶技術書誕生の一助となり、『耕織圖』が後世に及ぼした影響は甚大である。私は數年來、各地に傳存する『耕織圖』を探索し、資料の収集に努めてきた。その結果、從來未紹介の新資料の發見もあつたので、それらの資料の一端を紹介しながら、あわせて『耕織圖』流傳の意義を考えてみた。